

第5分科会

研究主題

友だちとかかわり合いながら言語活動を充実させ、
進んで学ぶ子供の育成

広島市立口田東小学校

日 程

8:30	9:00	9:20	9:30	10:15	10:30	11:15	11:30	12:30	13:30	13:40	14:40	15:05	15:10
受付	業前運動	移動	公開授業1	移動	公開授業2	移動	授業協議会	昼食	開会行事	研究発表	研究協議	指導講評	閉会行事

公開授業案内

区 分	授 業	場 所
公開授業1	第3学年 器械運動（跳び箱運動）	体育館
	第5学年 保健 心の健康	5年教室
公開授業2	第1学年 器械・器具を使つての運動遊び	口田公民館
	第2学年 走・跳の運動遊び	運動場
	第6学年 器械運動（マット運動）	体育館

学校所在地



交通機関

- 中深川線（JRバス・広島バス・広島交通一基町経由・にぎつ経由）「下岩ノ上（しもいわのうえ）」バス停から徒歩約13分
- JR芸備線「安芸矢口」駅から徒歩約25分

広島市立口田東小学校



所在地：〒739-1734 広島県広島市安佐北区口田二丁目1番1号

連絡先：TEL (082)843-4864 FAX (082)843-1274

E-mail：kutita-e@e.city.hiroshima.jp

H P：http://cms.edu.city.hiroshima.jp/weblog/index.

校長：太田 治

児童数：582名

◎教育目標

心豊かでたくましく生きる口田東の子どもを育てる ～信頼され、期待に応える学校～

◎学校紹介

閑静で整然とした町並みに包まれるようにたたずむ本校は、開校当時から「はなみずき」が、校舎前に彩りを添えており、四季折々の木々とともに暖かい雰囲気醸し出しています。

本校の正門前にある石碑には、「考える子 強い子 やさしい子」と刻まれており、児童一人一人が、自分自身や周りの友だちのことをよく考え、強い心とやさしい心配りをもって行動することができるよう、日々の教育活動を行っています。

広島市立口田東小学校

1 研究の構想

(1) 研究主題

友だちとかかわり合いながら言語活動を充実させ、進んで学ぶ子供の育成

(2) 研究主題設定の理由

本校は、これまで「論理的に考える子供の育成～考えを深める授業づくり」を研究テーマに掲げ、算数科と広島市で行われている言語・数理運用科の授業改善に取り組んできた。子供が思考・判断し、表現する学習活動の場として、自分の考えをもつ場を意図的に設定し十分な時間を確保することにより、自ら課題を解決しようとする意欲を高める上では成果があった。しかし、子供同士が互いにかかわり考えを深め合うという点については課題が残った。

体育科においては、昨年度のアンケート結果から、運動・体育科の学習ともに「好き」と答えた子供は、全学年において約80%を示し、多くの子供が運動することを楽しいと感じている。しかし、個々での活動が中心だったために、動きの「できた」「できない」を自分で確認することが難しく、「自分はできている」という自信につながっていなかった。また、「できない」という自信のなさから、子供が進んで運動に取り組めない実態がある。

このように、これまでの研究やアンケートで明らかになった課題として、かかわり合いが少ないために考えを深め合えていないことや、自信のなさや苦手意識から進んで運動する子供が少ないことが挙げられる。

そこでまず、学ぶべき内容・身に付けさせたい内容を明確にし、子供たち一人一人が自分の課題を知り、運動に取り組めるようにする。そして、子供同士の関わり合いや教師による子供への言葉がけを大切にし、言語活動の充実を図る。そうすることで、「わかる」「できる」につながり、子供たちが進んで運動に取り組めると考え、研究主題を「友だちとかかわり合いながら言語活動を充実させ、進んで学ぶ子供の育成」とした。

(3) 研究の仮説

学習のめあてに対して、一人一人が自分の力に合った課題をもち、言語を通じて友だちや教師と共にかかわり学び合えば、自分の伸びが分かり運動の楽しさを味わえ、進んで学ぶ子供が育つであろう。

(4) 研究内容

ア 発達の段階を踏まえた指導と評価の在り方

(ア) 技能（できる）、態度（かかわる）、思考・判断（わかる）のバランスと系統性を踏まえた指導計画の作成

(イ) 適切な学習評価の工夫（指導と評価の一体化）

イ 運動への関心や意欲を高め、自ら考え工夫する力を身に付ける指導方法の工夫

(ア) みんなで「考える・話し合う・伝え合う」場面（スパイラルタイム）の設定

(イ) わかる、できるにつなげる学年の系統性を踏まえた言語活動

2 研究内容

(1) 発達の段階を踏まえた指導と評価の在り方

ア 技能（できる）、態度（かかわる）、思考・判断（わかる）のバランスと系統性を踏まえた指導計画の作成

各単元において、「小学校学習指導要領解説体育編」や「評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料」を基に指導計画を作成した。その際、教師は子供の発達段階や指導時期を考慮し、子供が学ぶべき内容や子供に身に付けさせたい内容、各運動の特性を理解した上で計画を作成した。そして、学習のどの場面でどの観点に基づいて評価するかを明確にした指導計画に沿って授業を実施し、評価を次の指導へ生かすようにした。

(ア) 走・跳の運動遊び（走の運動遊び）における指導計画

低学年では、「くっちーずミッション」～かけっこ・リレーあそび～とし、本校のキャラクターである「くっちー」からの指令をクリアしながら、小学校学習指導要領解説体育編に書かれている、走の運動遊びの指導内容「いろいろな方向に走ったり、低い障害物を走り越えたりすること。」（技能）、「運動に進んで取り組み、きまりを守り仲よく運動したり、勝敗を受け入れたり、場の安全に気を付けたりすること。」（態度）「走ったり跳んだりする簡単な遊び方を工夫できるようにする。」（思考・判断）を発達段階に応じて整理し学習を進めている。指導計画には、これら3つの観点をのせ、指導する内容をはっきりさせた。



くっちー

第1学年では「かけっこやリレーを楽しむ」、第2学年では「真っ直ぐ速く走るためのポイントや低い障害物を走り越えるための工夫」に視点をおき、授業づくりを行った。「やってみる①」は、走の運動遊びを行うための基本的な動きを、いろいろな場で楽しみながら身に付けていく時間である。（技能）例えば、「ぴよんぴよんコース」や「くるくるコース」のように、走り方や用具を組み合わせると、楽しい場を簡単に作ることができる。子供たちが夢中になって取り組める場を一単位時間内に構成する。そして、スパイラルタイム「考える・話し合う・伝え合う」場面は、本時のめあてに迫る言語活動を行い、「わかる」「できる」につながる思考を深めていく時間である。（思考・判断）さらに、「やってみる②」は、一人一人が本時のめあてに対し自分の課題をもち、友だちと互いにアドバイスし合ったり教師の言葉がけを参考にしたりしながら、技能の習得や向上を図っていく時間である。

このように、身に付けさせたい技能や考えさせたいことを明確にした上で、それにかかわる態度とのバランスを考えて計画を作成した。



「ぴよんぴよんコース」



「くるくるコース」



スパイラルタイム

イ 適切な学習評価の工夫（指導と評価の一体化）

学習評価を行うために評価規準を設定することは、子供の学習状況を判断する際の目安となり、指導と評価を着実に実施することにつながった。学習評価の工夫改善を進めるに当たっては、学習評価をその後の学習指導の改善に生かすことが大切である。

そこで、指導計画を作成する際に、指導と評価の一体化を図るため、毎時間「運動スケッチ」(図1)を教師が作成した。これは、授業後の目指す子供像をイメージし、そこに向かってどんな運動や話し合い活動をすればよいか、何をおさえるべきかを考え、簡単な絵や言葉で表したものである。このスケッチを作成することで、教師の子供への言葉かけや指導はよいのか、評価すべき点を見落とししていなか、指導と評価の視点から授業前の計画と授業後の結果を比較することができ、指導と評価の一体化につながると考えた。

さらに、毎時間の評価規準にしたがって、子供の学習の状況について、行動観察だけでなく、学習カードの記述内容や子供による自己評価からも的確に評価し、評価したことを次の学習指導に生かしていくようにした。(学習カードについては「4 実践の記録」で紹介する。)

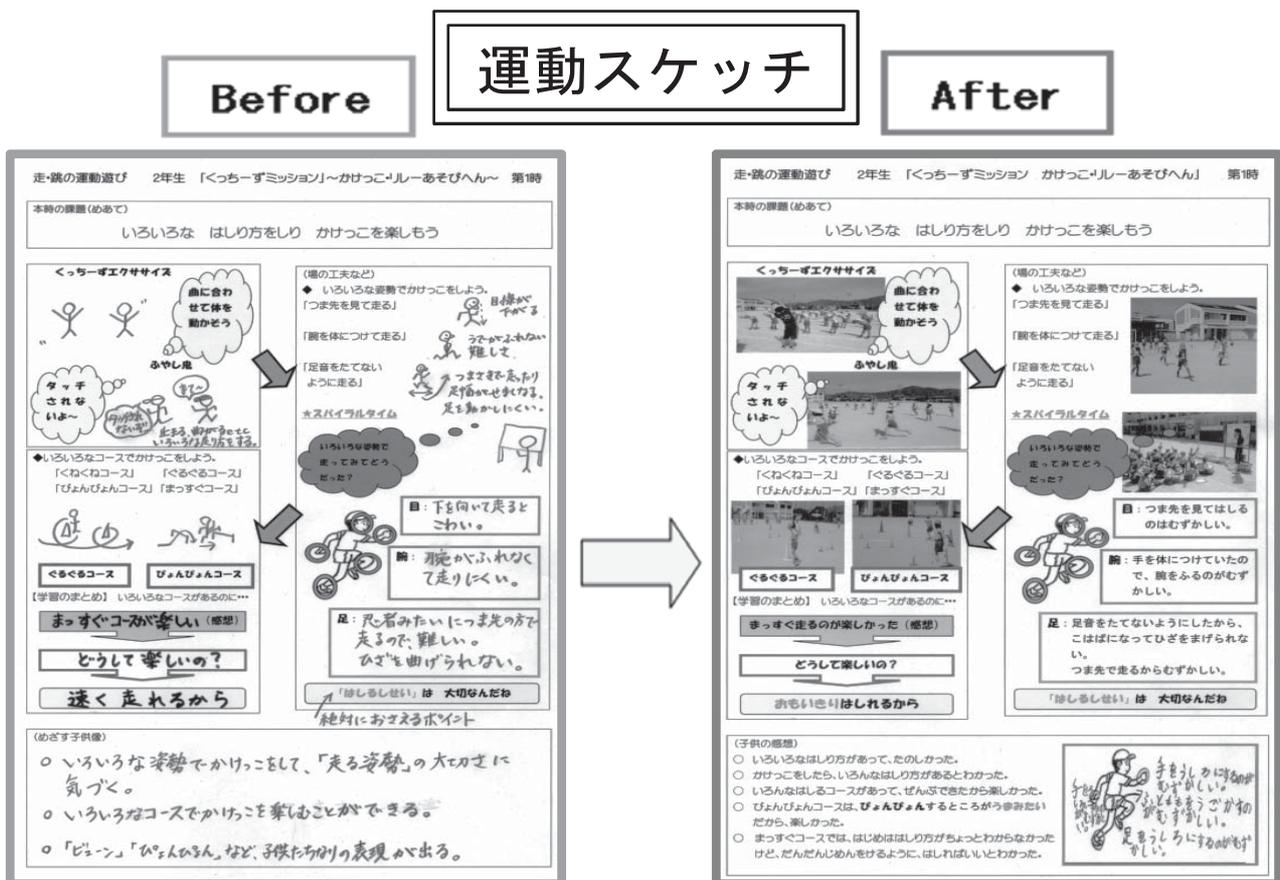


図1 運動スケッチ

(2) 運動への関心や意欲を高め、自ら考え工夫する力を身に付ける指導方法の工夫

ア みんなで「考える・話し合う・伝え合う」場面（スパイラルタイム）の設定

言語活動の充実を図るためには、子供一人一人が技のポイントやコツ、練習方法を考えたり、友だちの課題を解決するために話し合ったり、互いに動きのアドバイスをし合ったりする場面が必要である。

右の（図2）のように「やってみる①」で子供たちは、今もっている自分の力で課題に取り組む。すると、できないことやもっと上手にできるようにになりたいことなど、一人一人の課題がでてくる。それを解決するために、互いの動きを「見合う・教え合う」、どうすればできるのか、練習方法をどうするのか、運動のポイントやコツの共有などを「考える・話し合う・伝え合う」ことが必要となる。

このようにグループや全体で言語活動を通じて「考える・話し合う・伝え合う」場面を本校では、「スパイラルタイム」（図2）と呼び、思考を深め「わかる」「できる」につなげていく場として大切にしている。

そして、「やってみる②」は、スパイラルタイムで分かったことを意識し、さらに技能の定着や向上に向けて練習に取り組んでいく。

このように、実践と思考を繰り返しお互いに高まっていくことで「自分はできる」という自信につながると考えた。

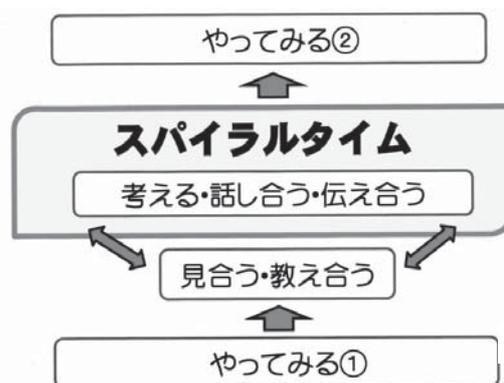


図2 スパイラルタイム



みんなで話し合う場面

（ア）器械運動（マット運動）におけるスパイラルタイム

小学校学習指導要領解説体育編の「高学年の器械運動（マット運動）」にある、「課題の解決の仕方を知り、自分の課題に応じた練習の場や段階を選ぶこと」「技をつなぐ方法を知り、自分の力に合った技を組み合わせること」ができるように場の工夫をし、思考を深めていく。

第6学年では、まず「ダイナミック」について一人一人がイメージをもち、より大きな動きを考え、自分が挑戦したい技を選んだ。次に、スパイラルタイムで前転系・後転系・側方倒立回転の動きのポイントやコツを話し合ったり、自分の課題を解決するためにどうしたらよいか互いに考えたりした。そして、互いの動きを見合いアドバイスしたり、教師の言葉がけを参考にしたりして、技の習得や向上につなげていった。



グループで話し合う場面

イ 「わかる」「できる」につなげる学年の系統性を踏まえた言語活動

本校では、「①自分の動きを言語化すること（自らが体を動かすときの感覚「運動のコツ」を言葉にする）」「②友だちの動きや映像などをもとにして動きを説明すること」を子供たちが行うことで、言語活動が充実すると考えた。また、教師の働きかけや言葉がけにより、子供たちのかかわり合いが豊かになり、子供たちの活動が、ねらいに迫り「わかる」「できる」につながるのでないかと考えた。

ここでの「わかる」とは、「動きを言語化できること」「互いの考えを伝え合うこと」とする。また、「できる」とは、「感覚や動きを身に付けることができる」とする。「わかる」「できる」につながる言語活動を整理し、具体的にしたもののが「表1：言語活動に関する学年の系統性とその具体化例（マット運動）」である。

表1 言語活動に関する学年の系統性とその具体化例（マット運動）

	学年目標(1)	「わかる」「できる」につながる言語活動
低学年	簡単なきまりや活動を工夫して各種の運動を楽しくできるようにするとともに、基本的な動きを身に付け、体力を養う。	ア 友だちのよいところが言える。「〇〇さんは、後ろ転がりが、上手です。」 イ 友だちがもっとうまくなるための方法が言える。 「〇〇さんは、手を着いたらいいです。」 ウ 自分のうまいところが言える。「ぼくは、後ろ転がりができます。」 エ 自分が困っているところが言える。「ぼくは、後ろ転がりができません。」 オ もっと楽しく遊べる方法が言える。 「うさぎみたいに、みんなで3つの玉を跳び越してみようよ。」 カ グループで頑張ったり工夫したりしたことが言える。 「動きを合わせて転がりました。」 キ 運動の感覚(コツ)を自分なりの表現で言える。「クルンと回りました。」
中学年	活動を工夫して各種の運動を楽しくできるようにするとともに、その基本的な動きや技能を身に付け、体力を養う。	ア 友だちのよいところが言える。「〇〇さんは、後転の手が上手です。」 イ 友だちがもっとうまくなるための方法が言える。 「〇〇さんは、手をしっかり着いたらいいです。」 ウ 自分のうまいところが言える。「ぼくは、後転で手をきちんとして着けます。」 エ 自分が困っているところが言える。「ぼくは、後転スムーズに回れません。」 オ 課題がもてるように言葉がけを具体的に言える。 「パッと足が開いているよ。」 カ グループで頑張ったり工夫したりしたことが言える。 「〇〇さんが、足をしっかり見てアドバイスしてくれました。」 キ 運動の感覚(コツ)を自分なりの表現で言える。 「バン クルン トンの順に動きました。」
高学年	活動を工夫して各種の運動の楽しさや「喜びを味わうことができるようにするとともに、その特性に応じた基本的な技能を身に付け、体力を高める。	ア 友だちのよいところが言える。 「〇〇さんは、ゆりかごのときと同じように手をしっかり着いています。」 イ 友だちがもっとうまくなるための方法が言える。 「〇〇さんは、両手でマットを強く押せば開脚立ちができると思います。」 ウ 自分のうまいところが言える。 「ぼくは、手の付き方に気を付けて開脚後転をすることができます。」 エ 自分が困っているところが言える。 「ぼくは、開脚後転でいつ足を開いたらいいかわかりません。」 オ 課題解決の仕方がイメージできるように言葉がけを具体的に言える。 「足先が頭を越したら足を開くといいよ。見ておくれ。」 カ グループで頑張ったり工夫したりしたことが言える。 「友だちが背中をまっすぐに伸ばしたいと言うので、ゴムひもの位置を高めにしてあげました。」 キ 運動の感覚(コツ)を自分なりの表現で言える。 「脇が開き過ぎているからキュッと閉じたら、後転が上手になるよ。」

3 実践事例

(1) 発達の段階を踏まえた指導と評価の在り方

ア 技能（できる）、態度（かかわる）、思考・判断（わかる）のバランスと系統性を踏まえた指導計画の作成

(ア) 第2学年走の運動遊び「くっちーずミッション」～かけっこ・リレーあそび～

指導計画（表2）を作成する際には、技能、態度、思考・判断をどの時間に評価するのか明確にしたため、その評価に即した授業を構築するよう努めることができた。

子供たちは、第8時から第11時で「速く走るためのポイント」を考えたり、「姿勢を崩さず低い障害物をどうしたら走り越せるのか」、グループごとに障害物の置き方や置く位置を工夫し互いに説明したりしていた。走の運動遊びを楽しみながら進んで取り組む子供の姿が多く見られた。

表2 第2学年 走・跳の運動遊び（走の運動遊び）単元の指導計画

単元目標	(技能) いろいろな方向に走ったり、低い障害物を走り越えたりすることができる。 (態度) 順番やきまりを守り勝敗を受け入れて、仲よく運動しようとしたり、場の安全に気を付けようとしたりしている。 (思・判) 走る簡単な遊び方を工夫したり、走る動き方を知り、友だちのよい動きを見付けたりしている。					
時間	7	8	9	10	11	12
学習内容	○ふやし鬼 ○いろいろな姿勢やコースでかけっこ	○ねことねずみ ○しっぽとりかけっこ	感覚づくり（カンガルー・ケンケン・スキップ） ○かごを走り越える ○ダンボールを走り越える ○ダンボールを走り越し折り返しリレー ○ダンボールを走り越し折り返しリレー			
	スパイラルタイム					
技能			★低い障害物(かご)を走り越えることができる。			★自分たちが考えたコースで姿勢を崩さず折り返しリレーができる。
態度	★			★	★	★
	「走の運動遊びに進んで取り組んでいる」 「順番や決まりを守り勝敗を受け入れ友だちと仲よく運動している」 「場や用具の使い方の安全に気を					
思判断		★速く走るためのポイントやコツを考えたり、友だちのよい動きを見付けたりしている。	★姿勢を崩さず低い障害物を走り越えるための工夫をしている。	★姿勢を崩さず低い障害物を走り越えるための工夫をしている。	★姿勢を崩さず低い障害物を走り越えるための工夫をしている。	

イ 適切な学習評価の工夫（指導と評価の一体化）

第2学年の「走の運動遊び」では、評価の工夫として「運動スケッチ」や「学習カード」による評価を取り入れた。図1の「運動スケッチ」により、第7時においては「走るときの姿勢が大切」であることをしっかりおさえることができた。このように、単元の指導計画とともに「運動スケッチ」や「学習カード」を活用することで、学ぶべき内容や身に付けさせたい内容が明確になり、指導と評価の一体化につながった。

(2) 運動への関心や意欲を高め、自ら考え工夫する力を身に付ける指導方法の工夫

ア みんなで「考える・話し合う・伝え合う」場面（スパイラルタイム）の設定

第6学年 器械運動（マット運動）「ダイナミックマット」

本単元では、「側方倒立回転」を共通の課題として技を習得するとともに、最終的には「側方倒立回転」とこれまでに習得した「前転系」「後転系」の運動の組み合わせ技に取り組み、互いに見合う場の設定を行った。

スパイラルタイムでは、技の習得が早い子供が、そうでない子供に動きのポイントやコツを伝えたり、技能の習得が遅い子供が、技能の習得が早い子供の動きを見たりし、「わかる」「できる」につなげることができた。

イ 「わかる」、「できる」につなげる学年の系統性を踏まえた言語活動

第6学年 器械運動（マット運動）「ダイナミックマット」

本単元では、表1のように子供たちが「課題の解決の仕方がイメージできるように言葉がけを具体的に言える」ために、教師の言葉がけを大切にされた。側方倒立回転ができない友だちに対し、「膝を伸ばしたらいいよ。」というアドバイスが子供同士で合った。そこで、教師が「足が上がらないのは、わかっているようだよ。どうしたらいいんだろうね。」と言葉がけをした。すると、子供たちは「鈴の付いたゴムを使ったらゴムを越そうと足があがるよ。」と、課題に対しどのように練習に取り組めばよいかを考えることにつながった。このように、教師の具体的な言葉がけにより、子供同士の考えを深めることができた。

4 実践の記録

(1) 発達の段階を踏まえた指導と評価の在り方

第2学年の「走の運動遊び」では、単元の指導計画に基づいて子供の発達の段階を踏まえた授業づくりを行い、指導と評価の一体化に努めてきた。授業で子供たちは、毎時間学習カードを活用し、めあてに対する自分の課題を確かめたり(図3)、グループごとに走る場を工夫したことをまとめたりした(図4)。このように、学習中の思考を残すことで、子供の技能の習得状況や学習意欲、思考・判断の高まりを確認でき、次の指導に生かすことができると考え取り組んだ。

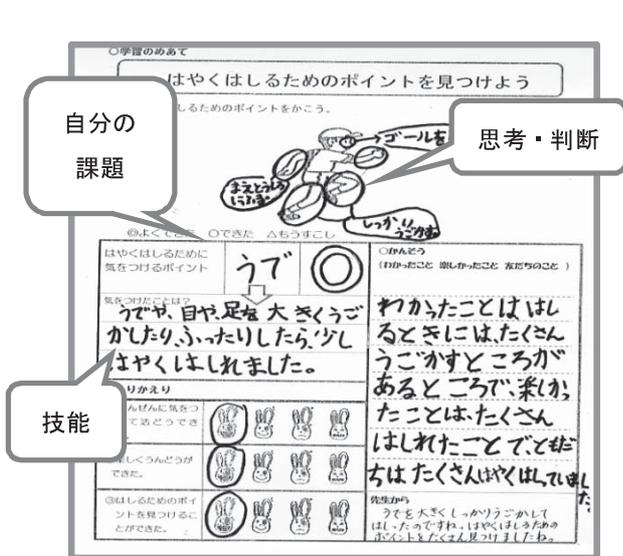


図3 自分の課題を知り練習したこと

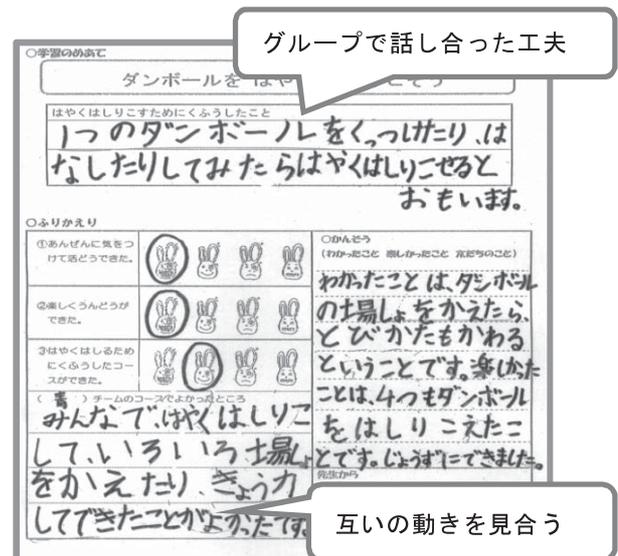


図4 スパイラルタイムで話し合い実践したこと

(2) 運動への関心や意欲を高め、自ら考え工夫する力を身に付ける指導方法の工夫

子供同士の言語活動を充実させるために、子供同士のかかわり方や教師による子供への言葉がけが大切である。第6学年「器械運動(マット運動)」では、教師の言葉がけによる子供同士のアドバイスの変容をまとめた。

第6学年「マット運動」(側方倒立回転)

やってみる①の後、スパイラルタイムを行った後のやってみる②での教師の言葉がけ

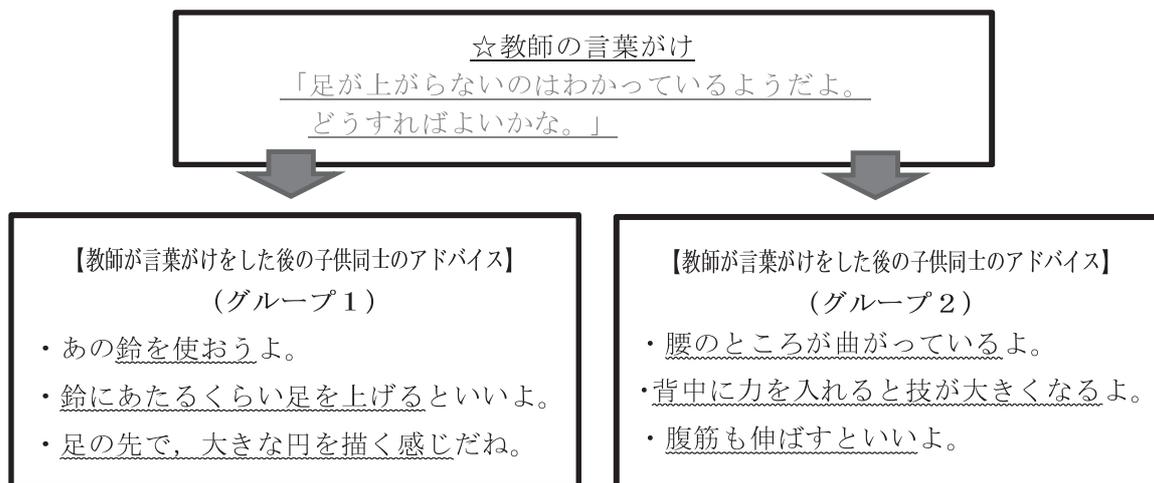
- 動きを大きくするポイントは何でしょう。
- 本人は、足が上がらないことは、分かっているようです。どうすればよいですか。
踏のついたものの利用への、必要性を感じさせながらの促し
- 足の高さが、どうなったか教えてあげてください。
- 手は、足は、視線はどうすればよいですか。
- どんな感じだったですか。できたときの感想を言ってみましょう。

【教師が言葉がけをする前の子供同士のアドバイス】
(グループ1)

- ・足を伸ばしたらいいよ。
- ・こわがっているからだよ。
- ・この高さに足を届かせて。

【教師が言葉がけをする前の子供同士のアドバイス】
(グループ2)

- ・膝を伸ばしたらいいよ。
- ・ぼくの動きと比べて見てよ。
- ・自分がどうなっているのかわからないよ。



5 研究のまとめ

(1) 成果

下のグラフは、第6学年の「マット運動」において、子供同士でアドバイスし合った内容を学習カードの記述から「運動の構造に関すること」「意欲・感想等に関すること」「技能の向上に関すること」に分類(図5)し、その割合を示したものである。

子供たちの「運動の構造に関する」言語のかかわり合いが増えると、「技能の向上に関する」言語が増えていることがわかる。(第13時～第15時)

また、最終的に「技能の向上に関する」言語が増えると、「意欲・感想等に関する」言語が増えていることもわかる。(第15時～第18時)

スパイラルタイムにおいて、子供同士のかかわり合いが深まり言語活動が充実することによって、意欲や技能の向上につながっているとわかった。

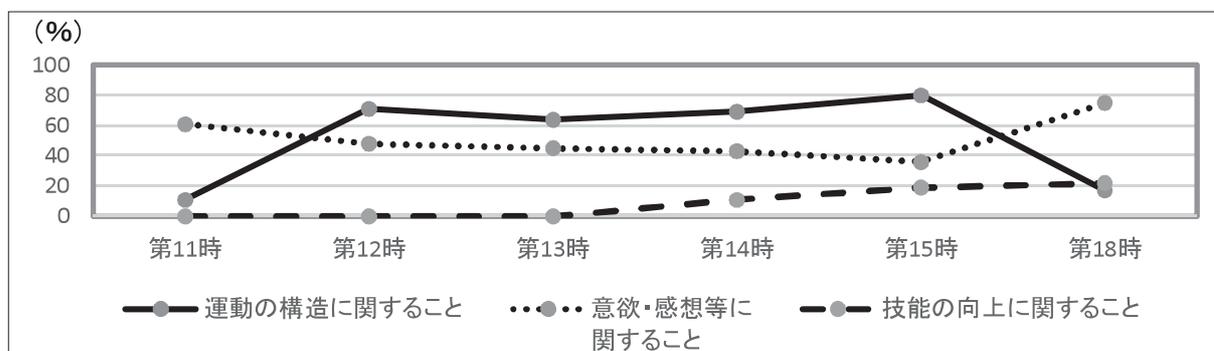


図5 学習カードの記述の分類

(2) 課題

子供同士のかかわり合いを言語を通じて充実させるために、教師が指導のねらいに合わせ、子供への言葉がけを具体的にする点について、教師の具体的な言葉がけによってどのように変容が合ったのか、毎時間子供たちを見取る難しさが課題として残った。指導計画の中に、教師の働きかけをより明確にし、指導と評価の一体化に努めていきたい。

また、発達段階によっては、子供同士のかかわりだけでは技のポイントやコツが言葉で伝わりにくかったり、頭で動きを理解できていても技能に結びつかなかったりすることがあった。そこで、「わかる」「できる」につなげる手段の一つとして、タブレットのICT機器の有効的な活用方法を今後も検討する必要がある。

<研究発表資料>

研究主題

「わかる・できる・かかわり合う」体育科学習

～児童一人一人が意欲的に活動する体育科指導の在り方を求めて～

庄原市立口北小学校 教諭 梶川 匡 士

庄原市立峰田小学校 教諭 佐々木 翼

1 研究主題設定の理由

研究した2校における事前調査では、以下のような結果が得られた。

表1 本研究に係る事前アンケート調査（峰田小第3学年、口北小第5学年及び第6学年）

質問項目	とても	まあまあ	あまり	全く
マット運動は好きですか。	13	11	1	2
体育科の学習は楽しいですか。	17	6	3	1

児童は、一輪車や水泳、持久走や縄跳び等の運動を楽しみにしている。普段から体を動かすことを好み、どの体育科の学習にも積極的に取り組む姿が見られる。しかし、表1に示すように、「体育科の学習は楽しいですか。」という質問に対して15%もの児童が否定的な回答をした。否定的な回答をした4名のうち2名はマット運動についても否定的な回答をした。これらの児童から聞き取りをしたところ、痛そうだと感じる動きを怖がっていたり、どう動けばよいのか分からなかったり、友達に失敗するところを見られるのを嫌がっていたりしていることが分かった。このような課題を解決するために、技のイメージをもったり、自他の学習活動を振り返ったりすることに留意して研究を進める事とした。

そうすることで、児童一人一人が意欲的に活動する体育科指導の在り方を追究することが、「わかる・できる・かかわり合う」体育科学習につながると考え、本研究主題を設定した。

2 研究の仮説

発達の段階を踏まえながら児童の実態に基づく指導と評価の計画を作成し、以下の3点に留意させれば、体を動かすことの楽しさを知り、意欲的に体育科授業に取り組むだろう。

- ① 自己の能力に適した課題をもって活動させること
- ② 技のイメージをもたせて、動きを高めるための活動をさせること
- ③ 自他の学習活動を振り返り、動きのポイントや自他の伸びを自覚させたり、新たな課題をもたせたりすること

3 研究内容

(1) 発達の段階を踏まえた指導と評価の在り方

ア 実態に応じた指導と評価の計画

実態に応じた指導を可能にさせる単元計画

表2 (A) に示すように、単元前半に既習の技や本単元で新たに身に付けさせたい技に取り組ませる時間を設けた。これらの技の「難しさ」を言葉で表現させ、それらを解

決していくような単元を立て、児童の実態に応じた指導を可能にした。また（B）に示すように、指導した技能についての児童による自己評価や相互評価、教師による評価等を次時の学習に生かせるような単元にした。次時ではつまずきが多かった事項について練習を焦点化させ、児童に思考させる場を与えるようにした。

表2 実態に応じた指導と評価の計画

(口北小：第5学年及び第6学年)					(峰田小：第3学年)			
時間	1	2	3	4	7	8	9	10
準備の運動	慣れタイム【腕支持・逆さ感覚・回転感覚】				・アザラシ			
課題の追究	(A) 転がっているいろいろなことを感じ取ろう。	逆さになって「マイがたし」を見つけよう。	「マイがたし」を解決して、選んだ技の「やがたし」を見つけよう。		技を繰り返そう。	技を組み合わそう。	チャレンジ！ 「くるとりん☆パッ！」 練習してきた成果を発表しよう。	
	・ 既習内容の技の動きを確認する。 ・ いろいろな場で回転技（前転・後転・開脚前転・開脚後転・仲しつ後転・跳び前転）を楽しむ。 ・ 自分が取り組んだ技の「がたし」（自分の動きで困ったことや難しかったこと）を挙げる。	・ 倒立技（倒立前転・側方倒立回転）につながるような逆さ感覚が味わえる場でのいろいろな技に親しむ。 ・ 連続図や友達の演技を見ているいろいろな倒立技について知る。 ・ 挑戦したい技を決め、「マイがたし」を技の連続図に書き込む。	・ 前時に見つけた「がたし」の中「マイがたし」（技やポイント）り、技の連続図に書き込む。 ・ 「マイがたし」を視点に、友達互評価しながら解決方法を考え続ける。 ・ どのように練習して「マイがたし」がどのような「やがたし」に変わるか振り返る。		・ 学習の狙いや進め方を知ると、技の組み合わせの連続図を描くことができるようになった技を組み合わせて練習する。 ・ つなぎの部分の動作のポイントを振り返り、練習する。 ・ 技の出来栄や授業の進捗を振り返る。			
終末	まとめ・振り返り				クール			
評価規準	(1)① 既習内容の技を高めるために、進んで運動に取り組み、楽しさや喜びに触れようとしている。	(1)② 場の状況や、器具の安全に気を配りながら約束を守り、友達と助け合っ技の練習をしようとしている。	(3)① 自分の力に合った安定した基本的な回転技やその発展技ができる。	(2)① 友達と、自分に合った（場、注意点、等）を選んで練習することで、「マがたし」がどのようなかわっている。	(1)② 自分の力に合った技を繰り返したり組み合わせたり、発展した回転技や倒立技に取り組みたりすることができる。	(3)③ めあてを持って運動している。	(1)④ 発展した回転技や倒立技に取り組みたりすることができる。	(2)⑤ きまりを守り、友達と励ましあいながら運動しようとする。
				(1)③				
評価	態 視察・学習カード	視察・学習カード		学習カード	観念・学習カード		観念・学習カード	観念・学習カード
	思 技		観念			観念		

(2) 運動への関心や意欲を高め、自ら考え工夫する力を身に付ける指導方法の工夫

ア 児童同士での高まり合いを目指すための工夫

ゴール（選んだ技の完成型）を明確にした練習

小学校体育（運動領域）デジタル教材を活用して、技の完成型のイメージをもたせたり、動きのポイントを確認させたりした。また、自己の能力に適した課題を決め、取り組む技ごとにグループを編成し、互いの課題解決に必要な練習の場や用具を選ばせるようにした。また、練習する際にはラミネート加工した連続図を用いながら、動きのポイントや動きのリズムをマーカーで記入させた。

イ 振り返る活動の工夫

グラフ化や数値化を用いた児童主体の評価活動

前時からの自他の伸びや気分の変容を自覚させるために、振り返りボードや数値を用いてワークシートに自己評価させたり相互評価させたりした。

4 研究の実際

(1) 発達の段階を踏まえた指導と評価の在り方

ア 実態に応じた指導と評価の計画

実態に応じた指導を可能にさせる単元計画

児童は、自分が感じた技に対する難しさを解決しようと、目的意識をもって場や用具を選ぶことができた。マット運動が苦手な児童であっても技能を向上させようと、意欲的に練習に取り組む様子が見られた。また表3のように、多くの児童がつまずいた箇所について練習を焦点化させることで、児童同士がかかわる質が高まり、動きのポイントを理解して動けるようになった。

表3 児童の自己評価や教師による評価から、次時に焦点化させた事項

焦点化させた練習		指導のポイント
回転系	勢いをつけて回ること 着地を安定させること	着手の位置、あごの開き、 着地位置、回転中姿勢
倒立系	膝を伸ばし、足を高く上げること	目線、着手、着地足の位置

手を遠くにすれば、早く回って起き上がりやすくなることを友達と見つけました。

(2) 運動への関心や意欲を高め、自ら考え工夫する力を身に付ける指導方法の工夫

ア 児童同士での高まり合いを目指すための工夫

ゴール（選んだ技の完成型）を明確にした練習

表4 児童が目指した技とそのための練習

児童が目指そうとした技	練習した技	選んだ場、用具
ロンダード	側方倒立回転、倒立	目線・着手・着地足ガイド、ゴムひも
開脚前転、開脚後転	前転、後転	坂道マット、重ねたマット、着手ガイド

表4のように、児童は自己の能力に適した課題を決め、その解決に向けて必要な練習に取り組んだ。自他の課題を解決するために必要な用具を選び、相互評価し合いながらかかわり合う楽しさを味わい、技能の向上を目指していった。

小学校体育（運動領域）デジタル教材を活用して、自分をもつ完成型のイメージだけで練習するのではなく、スロー再生や停止等動画のメリットを生かして練習することで技能の向上が見られた。また、実際の動きと比べながら動きのポイントをアドバイスし合う様子も見られた。



「ゆっくりした動きを見ることができたし、〇〇ちゃんがこうしたらいいよと教えてくれたので、どこをがんばったらいいかが分かりました。」



また、図1のように、児童はラミネート加工した連続図を用いて練習しながら動きのリズムやポイントを考えて書き込んでいった。リズムを声に出し合い、楽しみながら相互評価している様子がたくさん見られた。また、練習する度に、動きのリズムやポイントが、児童によって修正されたり加筆されたりして技のポイントを理解していった。さ

らに、相互評価していく視点も絞られて練習の質が高まり、技能を向上させることにつながった。目的意識をもたせ、児童の主体性を引き出しながら思考させたことは、技能を向上させていく上で有効な手立てとなった。



図1 児童がグループで加筆・修正していった連続図の変容

イ 振り返る活動の工夫

グラフ化や数値化による児童主体の評価活動

ボード（図2）や点数（図3）を用いることで、次時への意欲付けができた。また、何ができるようになって何が足りないのか自覚させることにもつながり、児童の主体性を引き出すことにつながった。



昨日よりひざが伸びて、足をまっすぐに上げることができるようになった。手を着く場所をいつも同じにしていきたい。得点：8点

マットでいろいろなわざができるようになってきてとてもうれしい。今度はかべなしでとう立がしてみたい。

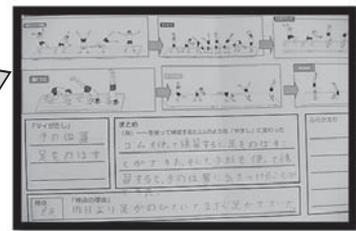


図2 峰田小ふり返りボード

図3 口北小ワークシート

5 成果と課題

表5 本研究に係る事後アンケート調査（峰田小第3学年、口北小第5学年及び第6学年）

質問項目	とても		まあまあ		あまり		全く	
	事前	事後	事前	事後	事前	事後	事前	事後
マット運動は好きですか。	13人	17人	11人	9人	1人	1人	2人	0人
体育科の学習は楽しいですか。	17人	19人	6人	8人	3人	0人	1人	0人

(1) 成果

表5に示すように、「体育科の学習は楽しいですか。」という質問に対して、肯定的な回答をした児童は、27人中27人（100%）となった。その要因として、自己の能力に適した課題をもったことや、グループで連続図にポイントを加筆したり修正したりしながら励まし合い、相互評価することで、怖さや失敗することの恐れが和らぎ、どう動けばよいのかイメージできたことが挙げられる。したがって、連続図や言葉を用いて動きのポイントを考えたり、動きのイメージを児童同士が共有化したりしながら評価（自己評価・相互評価）して思考させ、自他の課題を解決していくことは、児童の関心や意欲を高めるだけでなく、技能の向上にも有効であるといえる。

(2) 課題

事後アンケート調査において、マット運動が好きではないと回答した児童は、「全く好きではない」から移行した。この児童は、技能面での変化に時間がかかった児童である。練習法を考え、動きのポイントを1つ1つ丁寧に理解してイメージをもつことができたが、すぐには技能の向上につながらなかった。理解した動きのポイントを、実感を伴った動きにつなげ、技能の向上に生かすことができるよう、発達段階に応じて、器械運動と関連の深い動きを意図的に取り組ませ基礎となる感覚（支持、手足での移動、逆さ姿勢、回転、目の位置）を身に付けさせていきたい。（下線は向上あり）

研究主題

体育科における主体的な学びを生み出す指導の工夫

～第5学年ハードル走における単元構成，課題発見・解決学習を柱として～

福山市立霞小学校 寺井 勇 貴

1 研究主題設定の理由

ハードル走の授業を終えた時，どんな姿になっていたか事前アンケートを行った。「記録が伸びてほしい (40%)」，「コツが分かり，得意になっていた (35%)」，「イメージ通りに跳べるようになってほしい (20%)」と児童は希望や期待を持っていた。その反面，ハードル走が好きかどうかを尋ねると，ハードル走に苦手意識を持っている児童は50%いた。また，ハードル走が楽しくないと感じる時は，「つまずいたり，転んだりした時 (45%)」，「練習しても記録が思うように伸びない時 (25%)」，「どうすればうまく跳べるのか分からない時 (25%)」という回答が挙げられた。このことから，ハードルに対して恐怖心を感じるだけでなく，技能面の困難さからリズムカルに走り越すイメージが持てず，リズムカルに走り越すための自己課題が何なのかつかめていない児童が多くいることも分かった。

そこで，指導に当たっては，ハードルへの恐怖心を少しでも取り除く工夫を行った上で，自己課題を見つけやすくするために，かかわり合いを充実させ，相互評価をし合えるグループ学習を仕組んでいく必要があると考えた。

このように，児童の期待や不安に寄り添った単元構成をし，課題発見・解決する過程を通して「ハードル走」の持つ特性に触れさせる授業を展開することが，意欲を高めながら主体的な学びを生み出すと考え，研究主題を設定した。

2 研究の仮説

児童が感じている苦手意識を基に，①児童の希望や期待に応える単元構成，②課題発見・解決学習の設定をすることで，意欲を高めながら課題の発見・解決に向けた主体的な学びが生まれるであろう。

3 研究内容

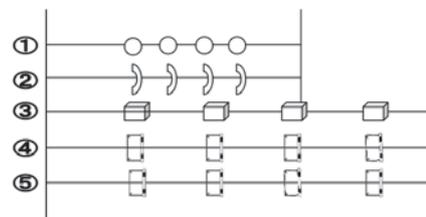
(1) 発達の段階を踏まえた指導と評価の在り方

ア 児童の希望や期待に応える単元構成

(ア)「リズムカルタイム」の導入

単元を通して，「リズムカルタイム」を取り入れ，毎時間取り組ませるように計画した。フラフープ，ミニハードル，段ボール，特性ハードル，ハードルのコースを設置し，リズムカルに走り越す身体感覚を育成できるようにした。

また，単元の始めは「リズムカルタイム」に取り組む時間を長くとり，徐々に短くしていくよう単元を構成した (右図)。

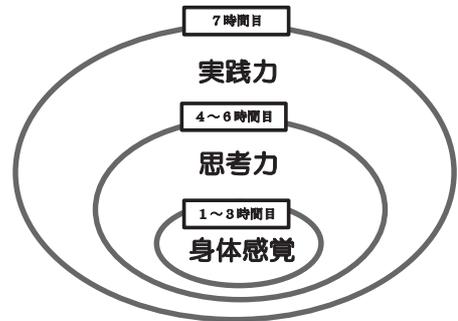


【リズムカルタイムの場】

- ①フラフープ
- ②ミニハードル
- ③段ボール
- ④特性ハードル
- ⑤ハードル

(イ) 単元を3ステップでとらえる

単元の中盤に「思考力」が身に付いていくよう、「思考力」を支える「身体感覚」の育成を単元の始めに位置付けて授業を展開した。第7時では実践力が身に付くよう単元を構成した（右図）。



(2) 運動への関心や意欲を高め、自ら考え工夫する力を身に付ける指導方法の工夫

ア 課題発見・解決学習の設定

(ア) 場の工夫

自己課題を解決するためには、課題解決に応じた場を選択して練習していく必要があると考えた。そこで、課題解決の場を複数設定し、場の特性を理解させた上で選択して取り組めるようにした。

(イ) 教具の工夫

児童アンケートから恐怖心を感じているために新たな思考へつながらなかったり、技能面の難しさを感じていたりすることがつかめた。

本単元では、ぶつかっても痛くないよう、ゲート式のハードル（特製ハードル）を作成し、恐怖心を取り除いていった。

(ウ) 掲示物の工夫

ハードリングの挿絵や踏み切り位置の図を用いてリズムカルに走り越すためのポイントを視覚的にとらえられるようにした。また、学級全体でイメージの共有化を図り、自己課題の発見・解決へとつなげた。

イ かかわり合いの充実

(ア) 異質・同質集団でのグループ学習と相互評価

事前に40m走と40mハードル走のタイムを計測し、タイム差の合計が同じになるようにグループを構成した（異質集団）。異質集団で発見した課題を基に、解決していくために同質集団を形成し、異質・同質の2通りのグループ学習を行っていった。

また、かかわり合いによって自己課題を発見できるよう、互いのハードリングを見合いながら相互評価を行わせた。

4 研究の実際

(1) 発達の段階を踏まえた指導と評価の在り方

ア 児童の希望や期待に応える単元構成

(ア) 「リズムカルタイム」の導入

複数のコースを設置したり、インターバル間の異なるコースを設定したりしたことでスモールステップで学習を行った。友達と競走したり、他のコースで挑戦したりと意欲を高めながら身体感覚を育成することをねらいとした。さらに、技能面における気付きや思考が生まれるよう教師の声かけも行っていった。

低く走り越した方が
スピードが出るね！



学習の段階		身体感覚			思考力		実践力	
時数		1	2	3	4	5	6	7
0		1. 学習の進め方や単元のねらいを知る	1. 体ほぐしの運動をする ・スキップ鬼ごっこ			1. 体ほぐしの運動 ・スキップ鬼ごっこ		1. 体ほぐしの運動 ・スキップ鬼ごっこ
10		2. 準備の仕方や決まり、安	リズム良く走り越す喜びや心地よさに触れる			リズム良く走り越す喜びや心地よさに触れる		自己課題に合わせて場や用具を選択して取り組む
			2. リズミカルタイムに取り組む ・フラフープコース ・ミニハードルコース ・設ポールコース ・特製ハードルコース ・ハードルコース			2. リズミカルタイムに取り組む ・フラフープコース ・ミニハードルコース ・設ポールコース ・特製ハードルコース ・ハードルコース		2. 課題に沿った練習をする - リズムコース - 踏み切りコース - スピードコース
			3. 踏み切り位置			3. 課題を再		

リズミカルタイム
= 身体感覚の
育成

取組む時間を徐々に短く

(イ) 単元を3ステップでとらえる

「身体感覚」を基盤に「思考力」、「実践力」へと移行していくようワークシートの工夫を行った。児童の気付きや振り返りに対して、教師が次時の思考に結び付くコメントを記入し、そのコメントに対する考えを書かせることで児童の思考が深まり、意欲や実践力につながるよう配慮した。

	1	2	3	4
準備の仕方を知り、いかに練習しよう。	リズムカルは何か考えよう。	ハードルをスレスレに歩くと歩幅も速く歩ける。	自分の課題を自分に合った場や用具で練習しよう。	自分の課題に合わせて場や用具で練習しよう。
リズムよく走る。	リズムカルに合わせると速く歩ける。	速く歩くと歩幅も速く歩ける。	自分の課題を自分に合った場や用具で練習しよう。	自分の課題に合わせて場や用具で練習しよう。
タイム	2.6	4.0	5.5	1.4
振り返り	足やリズムが合っていないので歩幅が速い歩幅で歩きたいです。	リズムカルとは同じ歩幅で歩きたいです。	自分の課題を自分に合った場や用具で練習しよう。	自分の課題に合わせて場や用具で練習しよう。
先生から	リズムカルは何か考えよう。	自分の課題を自分に合った場や用具で練習しよう。	自分の課題に合わせて場や用具で練習しよう。	自分の課題に合わせて場や用具で練習しよう。
考え				

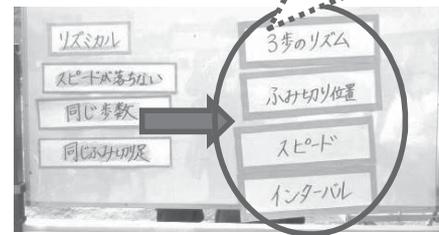
(2) 運動への関心や意欲を高め、自ら考え工夫する力を身に付ける指導方法の工夫

ア 課題発見・解決学習の設定

(ア) 場の工夫

「リズミカル」について、児童は動画や挿絵から【スピードが落ちない】、【同じ歩数で走る】、【同じ踏み切り足で踏み切る】ことの3点だと考えた。そのことから、リズミカルに走り越すための自己課題を焦点化していった。自己課題を解決するために以下の5つの場を設置した。また、自己課題が解決できたり、課題が見立てと異なっていたりする時には自由に場を選択して練習できるようにした。

自己課題の明確化



3歩コースA	ミニハードル×4
3歩コースB	特製ハードル×4
踏み切りコース	第1ハードルのみ
スピードコース	第1・第3…ハードル, 第2・第4…ミニハードル
チャレンジコース	ハードル×4 (試しの場)

(イ) 教具の工夫

特製ハードルを用いたことでハードルにぶつかる恐怖心を取り除きながら学習を進められるようにした。

踏み切り位置の近さに自己課題があると感じている児童は思い切って遠くから踏み切り、自分に合った踏み切り位置を見いだせるよう工夫した。



(ウ) 掲示物の工夫

運動のイメージをもち、ポイントを明確につかみやすくするために掲示物を活用した。児童が見付けたハードリングのポイントや動いたときの感覚を吹き出し形式で記入していった。単元を通して掲示し、常に児童が確認できるようにした。



イ かかわり合いの充実

(ア) 異質・同質集団でのグループ学習と相互評価

異質集団で発見した自己課題を同質集団において練習する中で解決し、さらに異質集団に戻り、成果を確認し合う活動を取り入れた。

かかわり合うことでできることが増えると思う。	
(事前) 肯定的…55%	(事後) 肯定的…100%
<ul style="list-style-type: none"> 自分では分からなかったことを友達が教えてくれた。(情意面) 自分の課題を見付けることができ、課題を解決するための方法を考え合うことができた。(学び方) 踏み切り位置が違っていると教えてくれ、インターバルが合っていないことに気付いた。(技能面) 	

事後に行った児童アンケートでは、技能面での変容をとらえるのみではなく、「情意面・学び方・技能面」の3つの視点から自分の変容をつかんでいた。

課題発見・解決学習でのかかわり合いにおいては、互いのハードリングを見合うことで相互評価し、アドバイスや課題の分析を行った。

異質集団で自己課題を発見する際には掲示物の前に集まり、友達のハードリングを見ての感想を述べ、相互評価を行って自己課題の発見につなげられるようにした。同質集団で課題を解決する際にはケンステップを置いて3歩のリズムを確かめたり、踏み切り位置に赤玉を置いて自分に合った踏み切り位置を見つけ出したりするなど、かかわり合って課題解決に取り組むことができるようにした。



5 成果と課題

(1) 成果

ア 児童の実態、期待や不安に即した単元構成、課題発見・解決学習を柱として授業を展開したことによって自分の変容を実感できた児童が100%になり、技能の高まりも見られた。

イ 異質・同質集団での学びにより、自ら課題発見・解決していく「主体的な学び」のサイクルが生まれた。

学級平均	単元前	単元後
40m走	7.54 秒	7.42 秒
40mハードル走	9.60 秒	8.76 秒
タイム差	2.06 秒	1.34 秒

(2) 課題

ア 課題解決の場が多様であったため、自己課題を解決するための場の選択が適切に行えなかったと考えられる。また、自己課題が解決できたり、課題が見立てと異なっていたりした場合に、児童自ら場を選択し直して取り組む機会が少なかった。